

大学を取り巻く環境は、国立大学法人法の定める中期目標・中期計画第2期に入り、より厳しいものとなっていると感じる。不断の改革のための「大学評価」の必要性とともに、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーという3つのマニフェストに従い、初年時教育の充実、単位の実質化、キャリアパス教育等、学生の質（教育）の向上と研究の推進、社会貢献に向けて、大学人としての、より一層の努力が求められている。一方、大学（大学院）に進学する学生の資質に関しては、ゆとり教育の弊害が語られる一方で、進学率50%超と少子化という構造的な問題もある。すなわち、就職活動において、就職希望者と採用側のミスマッチが語られるように、大学と受験生との意識のずれもあるように思われる。一体、学生は、何を学ぶべきであろうか？また、大学はなにをすべきであろうか？

大学進学が20%台であった1970年代、大学は教養を高め、さらに、専門性を磨く場ではあったが、いまほど、キャリアパスが問われることはなかった。当時も石油ショックによる就職難があり、博士学位取得後の進路のきびしさ等から、大学院に進学するものは、50%前後であった（学校基本調査によると、1990年代初頭まで、大学院定員を入学者数は下回っていた）。一方、大学紛争の余波があり、大学には自由な時間が溢れていたように思う。いくつかの厳しい講義はあったが、比較的のんびりした時代であり、考える時間が十分にあった。特に、今のようにTVゲームや種々の娯楽設備等がなく、大学院時代はまさに、研究漬けの毎日であった。といて、今のように、様々な分析機器やキット類があるわけではなく、毎日、器具の洗浄や試薬の準備が忙しく、従って、毎日の指導で厳しく管理されることはなかった。自ら学び、自律することを実践せざるを得ない状況であったといえる。

さて、現代はどうであろうか？まず、大学院進学率は我々の大学で言えば、ほぼ100%に近づいている。また、教育面では、様々な優れた教科書が発刊されるとともに、インターネットを介して、原著論文等の一次情報を海外との時差なく、容易に入手できる。また、研究面では、専門家だけが調製できた試薬類や高度の分析を、キットや外注の形で容易に入手できる。すなわち、知識や技術が一部の専有であった時代から、誰でもがアクセスし、利用できる時代になってきている。極端なことを言えば（規制のことを除けば）、自宅のガレージで、組換え実験ができるガレージバイオ（DIYバイオ）の時代がやってきている。こうした時代において、学生が大学で学ぶことは何であろうか？

我々の大学のポリシーから、言葉を選ぶと「自学自習」が1つのキーワードであると思う。もちろん、「自学自習」が大学の放任を意味するわけではない。また、「自律と責任」が必要でもある。一方、ポリシーには書かれていない部分も多い。「自学自習」には、それを実践するモチベーションが必要である。評価にそぐわない「理想」「夢」、あるいは「情熱」は、ポリシーにあまり記載されていないが、極めて重要なキーワードである。生物と化学を広く包含する農芸化学には、多くの夢がある。植物分野でいえば、よりエネルギーコストが少なく、より持続的な生物生産が可能な植物や、有用物質生産性の高い植物、あるいは、環境浄化能の高い植物の育成がある。現実には、遺伝子組換え作物の受容を含め、壁は厚いが、その実現に向けて夢を語り続けたい。学生諸君には、モチベーションを高めるよい先達を見つけてほしい。一方、我々は、よい先達でありたいと毎日学ぶ日々である。

後書き

この原稿を投稿してから後、3月11日に発生した東日本大震災とその後の巨大津波により、大学で学ぶ状況はより緊迫度を高めたと感じている。すなわち、東日本において、多くの方が亡くなられ、また、2ヶ月

後の現在も被災した状態が続いている。また、福島第一原発はメルトダウンし、放射能汚染により多くの方が計画避難を余儀なくされている。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々にお見舞いと支援の気持ちを送り、さらには、絶え間なく復興に努力されている方々のご尽力に声援を送るとともに、大学人として、今こそ、大いなる復興の夢を語るべきであると感じている。また、夢実現のためのたくましさを今こそ発揮するべき時であると感じている。まさに、この危機的状況に如何に対応できるか、学んだことが問われていると感じている。